

SOAS (ロンドン大学) 図書館

奥 和 義

SOASとは

筆者は、2004年4月より1年間、関西大学からロンドン大学 (SOAS) で在外研究の機会を与えられた。ここでは、在外研究における主たる研究機関であったSOAS図書館の概要を紹介することによって、その責の一部を果たしたい。ただし、筆者は、図書館学や書誌学に関する研究者ではないので、あくまでも個人的経験の上に成り立つSOASの図書館紹介であることを最初にお断りしておかなければならない。以下では、まず最初にSOASの概略を紹介し、それからSOASの図書館の特徴を述べることにしよう。

SOASは、正式名称 The School of Oriental and African Studies : University of London と言い、日本では、ロンドン大学東洋アフリカ研究所、ロンドン大学東洋アフリカ研究学部、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院などと訳されている。イギリスと日本では、そもそも大学の成立事情が異なっているので、以上のどの訳語がもっとも適当であるかを判断することは難しい。ちなみに、ロンドン大学 (University of London) には、SOAS以外にも、University College、Imperial College、Goldsmiths College、King's College、Queen Mary、London School of Economics and Political Science (LSE)、Birbeck College、Courtauld Institute of Art、London School of Hygiene & Tropical Medicine、Royal Academy of Music、Institute of Education、等々のcollege群がある。ロンドン大学に属するCollegeはこれら以外にもあるが、すべてを書いているとそれだけで字数が多く必要になるので割愛している。

さて、Collegeは、それぞれ固有の歴史を持って発展してきているので、得意分野がある。ちなみに、SOASにも社会科学関係のFaculty(学部)があり、EconomicsのDepartment(学科)があるが、当然のことながら、スタッフの数は経済学を中心に発展してきたCollegeであるLSEに及ぶべくもない。逆に、



ロンドン大学の中心、SENATE HOUSE

日本研究、中国研究、アジア研究、アフリカ研究をおこなっているSOASのスタッフ数は、英国内でも群を抜いて多く、当該分野の研究拠点となっている。

SOASは、1916年に創設され1940年に現在の場所に移った。現在の場所は、大英博物館のほぼ北、Russell Squareの北西に位置し、ロンドン大学の本部があるSenate Houseという大きなビルディングに隣接している。

SOASのビルディングは3つある。1つは喫茶室、講義室などが入っている旧館、そしてそれに隣接して図書館、研究室、講義室などが入っている新館、最後にBruneiの国王が寄付してできたBrunei Buildingである。最後のものがもっとも新しく、講義室、研究室の他、Galleryがある。

SOASの日本語教育、日本研究の発達に関しては、大庭定男『戦中ロンドン日本語学校』に詳しい。それによると、対日戦争のために急遽、日本語教育が行われることとなり、語学の才に秀でていたと見なされた学生が集められたそうである。日本社会の研究者として国際的に名高いR. ドーアもその一人であり、当初中国語を勉強するつもりであったのが、日本語を勉強することになったようである。

英国における日本研究は、ケンブリッジ大学、オ

ックスフォード大学、シェフィールド大学、そしてSOASが4大センターと言われているが、日本研究の研究ポスト数ではSOASが群を抜いて多い(SOASが12に対して、オックスフォードが8、ケンブリッジが3、シェフィールドが7となっている。河合満朗「イギリスにおける日本研究」『日本研究』(国際日本文化研究センター紀要)第10集、1994年による)。

SOASの図書館

SOASの日本語学科の主任教授であったブライアン・モーランが書いているように、「SOASは大英帝国の植民地に派遣する人材を育成する学校」であったために、アフリカ、インド、中近東、東アジア全般の研究機関として世界に名高い。図書館の蔵書も、これら地域のものが、英語だけでなく各国語表記のものが揃えられている。

図書館の蔵書は、90万冊以上の書籍、5000タイトルに近い雑誌がある。筆者は、図書館で蔵書数を尋ねたが、正確な数はよくわからないようである。これはあまり細かいことにこだわらないイギリス的気質によるものか、たんに数字に弱いことによるのか、はたまた紛失本が多いことに起因するのか、原因はよくわからない。しかし、紛失本や未返却本があまりに多いのか、私の滞在中に、返却日を遅れると罰金が科されるようになった。罰金額は、貸出物の種類、貸出期間などによって違っているが、1日あたり25ペンス(50円前後)~75ペンス(150円前後)となっていた。

また、図書館の本をカバンに入れて持ち出そうとする不逞の輩も実際に2度ほど目撃した。図書館ゲートを通る時にbeep音が鳴っているのに、平然と通り過ぎようとする感覚にはいささか驚かされたが、図書館員は慣れた感じで「まあ、こっちに来なさい」と声をかけ、「いやー、うっかり入れていたんだ」と、何事もないかのような雰囲気では話が交わされていく。いささか横道にそれるが、イギリスに長く住んでいると、言い訳や原因を他人に押しつけることが、いちじるしく上達するのではないかと、いくつかの場面で思った。

さて、書籍、雑誌、新聞、CDといったあらゆる種類の図書館所蔵物の内、日本関係のものは約11万7000件、うち日本語で書かれたものが約9万6000件、日本語以外で書かれたものが約2万1000件ある(日本・韓国セクションで作成された資料による)。書



SOASのBrunei Galleryと旧館入口横

籍に限れば、日本語で書かれたものが約8万冊、欧文で書かれたものが1万冊以上、さらに数百タイトルの日本語雑誌があり、SOASの日本研究センターの現所長ティモン・スクリーチによれば「日本関連の蔵書の規模はヨーロッパ最大を誇り、アメリカで最高の図書館と同等とまではいかないにしろ、指折りの図書館に匹敵すると言える」のであり、この図書館が英国でも屈指の日本研究の拠点を支えているのである。さらに、小規模であるが、江戸時代の出版物の希少本のコレクションもある。また、先に述べたBrunei BuildingにはBrunei Galleryと呼ばれる美術館・展示スペースもあり、残念ながら日本美術はわずかであるが、中国の陶磁器類はパーシバル・デビッドコレクションと呼ばれる世界屈指のコレクションを所有している。

図書館は地上5階、地下1階のつくりになっている。図書館内は、基本的にすべて開架式書架になっており、ほぼ地域ごとにフロアと書架が構成されている。1階は受付、貸出返却デスクなどとともに、中近東、イスラム関係、社会科学関係(国、地域別でないもの)の図書があり、2階がアフリカ、アート、考古学、法律、3階が東アジア・東南アジアで日本、中国、韓国など、4階が南アジア関係の図書、日本語や韓国語で書かれた定期行物、大型の定期行物、5階が標準サイズの定期行物、新聞などとなっている。5階で日本経済新聞を1~2日遅れで読むことができる。また地下には、公文書、特別コレクション、地図などが納められている。

私がかつともよく利用した日本セクションに関しては、和書と和書以外に2区分されており、それぞれが経済関係、法律関係、文学関係などジャンル別に整理されている。ワンフロアに日本関係の書籍が集



SOASの建物



SOASの図書館のパフレット(表紙)

中しているのは、総合的に日本研究に関する文献を調べようとするものにとって、きわめて利便性が高かった。

もともとはSOASは大英帝国の植民地経営のための教育機関、対日戦争のための日本語教育機関であったために、そこではアジアやアフリカを総合的に研究・教育する必要性があった。そのことが結果的には、現在では「地域」を分析上の切り口にして、総合的に研究するという学風を生み出すこととなり、それは図書館の書籍の配列にも反映されているとも見なすことができるかもしれない。

さて、各階には、図書館蔵書検索用の端末が数台～10数台ずつ置いてあり、テストやレポート前などは利用が非常に混み合った状況になる。コピー機は1階に10台と5階に2台ある。2階の一部には、夏まではコンピュータールームがあったが、別棟にコンピュータールームができたため、秋以降は資料閲覧、学習用の場所となっている。また、CD、ビデオなどの視聴覚教材は、3階で利用可能となっている。

SOASはロンドン大学の1つのCollegeであるから、SOASのスタッフ、学生は他のロンドン大学のCollege図書館を利用することができる。利用条件は、学部学生、大学院生、スタッフによって異なっている。私はAcademic Visitorとして受け入れてもらった。SOASのIDカードでは、有効期限1年のStaff、ただしAcademic Hospitalityと記載されており、図書館利用に関しては実質的にスタッフ待遇であっ

たため、他のCollegeの図書館も容易に利用することができた。SOASの学生の中には、学生数に対して相対的に狭隘になった図書館スペースをきらって、他のcollegeの図書館で勉強するものもいるようである。

また、地下鉄Russel Square駅からSOASまで歩く間に、国際交流基金ロンドン日本語センター図書館が入居しているビルがあった。こちらに行けば、日本語、日本文化に関する新しい書籍類、日本語の新聞(日本経済新聞と読売新聞の国際衛星版)、雑誌などが利用できる。さらに、大英博物館も間近にあることから、帰宅前にふらりと立ち寄って、さまざま美術品をながめたりすることも可能であった。SOAS図書館は、そのように地理的にも恵まれた位置にあった。

さて、SOASの図書館について、個人的な体験をベースに紹介してきたが、その特色、魅力はどのように表現できるであろうか。関西大学社会学部の永井先生が、すでに的確かつ名文で表現されている。屋上屋を重ねるのを避けるために、その言葉を以下に借用させていただく。「この図書館の魅力のひとつは、さまざまな立場からのものの見方がいちどきにつかめるといふ点だろう。たとえば上海という都市社会のなりたちを調べるとき、戦前の日本人作家が書いた旅行記、国際租界を管理していたイギリス人警察官が残した記録、現在の中国の大学に所属する研究者の論文、台湾に移住した国民党要人の回顧

録など、多様な資料を同じフロアで読むことができる。さらにフランス租界についての研究書や、英米の中国研究の最新の業績も備えられている。こういった資料をひとつの場所で閲覧できるということは、人の考えを偏らせず、ものの見方をひろげていく力を与える。

そして、この図書館の本棚のありかたそのものが、SOASという研究機関の縮図でもある。かつての異文化研究は、英語の媒介を必要とすることが少なくなかったし、英語での発表が「最終目標」でもあった。そもそも、このような図書館が成立したことじたい、「大英帝国」の遺産なのだ。」

(注：<http://homepage3.nifty.com/ynagai/soasreport.htm>より引用)

最後に、日本関係の書籍の内、何度か関西大学図書館蔵書廃棄印のある本を見かけた。このことは、関西大学図書館からSOAS図書館への圖書の寄贈が

行われていることによる。名前を出すことは差し控えるが、関西大学、SOASの関連した先生、両図書館の職員の方たちの尽力によって、関西大学がSOAS図書館に寄与しているのを目の当たりにできたことは、関西大学の一教育職員としても大変うれしく感じた。

SOAS Library, University of London
Thornhaugh Street, Russell Square, London WC1H 0XG
TEL: (+44) 020 7898 4163, FAX: (+44) 020 7898 4159

国際交流基金ロンドン日本語センター図書館
The Japan Foundation Nihongo Centre Library
6th Floor, Russell Square House, 10-12 Russell Square,
London WC1B 5EH
TEL: 020 7436 6698, FAX: 020 7323 4888

(おく かずよし 商学部教授)